

大阪開成館所蔵の小倉末子書簡に見るピアノ教本

津 上 智 実

Pianist OGURA Suye's Piano Books and Her Letters in the Possession of Osaka Kaisei-kan

TSUGAMI Motomi

要 旨

本稿は、大阪三木楽器開成館の所蔵するピアニスト小倉末子（1891-1944）の書簡（8通）を吟味して、小倉が大阪開成館から出版した2巻のピアノ教本について、成立の経緯と内容構成に関する洞察を得ることをめざす。

8通の書簡はいずれも三木登吉（1879-1942、第5代大阪開成館社長）宛で、内6通（書簡1、2、3、6、7、8）が『新撰ピアノ教則本』（1919年1月）、4通（書簡3、4、5、6）が『ピアノ小曲集』（1919年2月）、1通（書簡8）が未刊に終わった幻の著書に言及している。

書簡の吟味から、次のことが明らかとなった。

- 1) 『新撰ピアノ教則本』については、三木から小倉への執筆依頼が1916年10月以前にあり（書簡1）、1917年5月までに脱稿し、6月に校正が終って（書簡2）、9月には出版の予定であった（書簡3）。
- 2) 小倉はこれを新たな書き下ろしとし、自作曲も入れる考えであった（書簡1）。
- 3) 校正後、小倉は似た性格の曲が2曲あることに気づいたので1曲を省いてほしいと三木に依頼し（書簡6）、1年後にもこの件を問い合わせている（書簡7）。
- 4) 第4版（1924）の準備に当たって小倉は加筆を行なった（書簡8）（だが実際には反映されなかった）。
- 5) 『ピアノ小曲集』も1917年8月4日までに脱稿し（書簡4）、執筆料の相談が行なわれた（書簡5、6）。小倉は、ピアノ初心者の上達にふさわしい曲の難易度、性質、内容、指遣いなどに至るまで細心の注意を払って作成した点で、教則本以上の労力を要したと明かしている（書簡6）。
- 6) 2冊のピアノ教本を揃えて朝鮮李王家へ献上したい、そのために出版時期を選びたいという意向が小倉にあり（書簡3）、それがこれらの出版が1919年まで延期された原因となった可能性が考えられる。
- 7) 『ピアノ学習者の心得』という原稿が三木に託されたが（書簡8）、未刊に終わったと見られる。

キーワード：小倉末子、書簡、大阪開成館、三木佐助、ピアノ教則本、ピアノ小曲集

Summary

This paper examines eight letters of pianist OGURA Suye (1891-1944) preserved in Osaka Kaisei-kan, a music and publishing house in Osaka.

OGURA published two piano music books from this house in 1919, namely, *Sinsen Piano Kyoosokubon* or *New Piano Manual (NPM)* and *Piano Syo-kyokusyu* or *Piano Small Pieces (PSP)*.

Seven of the eight letters were written between October 1916 (Letter No. 1) and August 1918 (No. 7) and one in 1923 (No. 8), all addressed to MIKI Tokichi (1879-1942), the fifth president, MIKI Sasuke, of Osaka Kaisei-kan.

Six letters (Nos. 1, 2, 3, 6, 7, 8) refer to *NPM*, four (Nos. 3, 4, 5, 6) to *PSP*, and one (No. 8) to an already completed but apparently unpublished book titled "Acquaintance for Piano Learning".

These letters make clear the following points:

- 1) OGURA was asked to write *NPM* by MIKI before October 1916; it was finished by May, proofread in June and planned to appear in September 1917.
- 2) She intended to write a new manual including some pieces composed by herself.
- 3) She asked MIKI to omit one piece from *NPM*, because it contained two pieces of similar character.
- 4) She proposed further improvements for its fourth edition in 1923, but it was not realized.
- 5) *PSP* was finished before 4th August 1917, its payment was discussed in the following letters in which OGURA argued that the compilation of *PSP* needed more effort than *NPM* in selecting and arranging pieces of appropriate difficulties, characters, contents and fingerings for piano beginners.
- 6) OGURA cherished the intention to dedicate a pair of *NPM* and *PSP* to the former Royal Family of Chosen and it could be the reason that their publication was postponed until 1919.

Keywords: OGURA Suye, letters, Osaka Kaisei-kan, MIKI Sasuke, Piano Manual, Piano Small Pieces

1) 本論の目的と背景

本稿の目的は、大阪三木楽器開成館の所蔵する小倉末子書簡について、その全体像を示すと共に、その中で言及されたピアノ教本類に関する発言に注目して、ピアノ教本類の成立と内容構成に関する理解を深めることである。

ピアニスト小倉末子¹⁾ (1891-1944) の書簡として現存するものは、今回取り上げる大阪開成館所蔵の8通(三木登吉宛、詳細は後述)の他には、目下のところ、神戸女学院所蔵の2通(C. B. デフォレスト院長宛、英文、1916年4月30日投函の絵葉書、および1930年9月18日付の書簡)と日本近代音楽館所蔵の9通(牛山充宛の絵葉書8通、幸田幸宛の絵葉書1通)が知られるのみであり、大阪開成館所蔵の三木登吉宛の封書8通(以下、「小倉書簡」と略記)は、音楽に踏み込んだ内容を持つことも与って、最も重要な書簡群と位置づけることができる。

ところで、小倉末子は大阪開成館から次の2巻のピアノ教本をほぼ同時期に出版している。

小倉末子編『新撰ピアノ教則本』(大阪開成館、1919年1月20日発行)

小倉末子編『ピアノ小曲集』(大阪開成館、1919年2月1日発行)

「小倉書簡」は、これら2巻のピアノ教本の出版を巡る著者から出版社への発言を留めるもので、出版の経緯や編纂の考え方を知る上で重要な手掛かりを提供してくれる。さらには、出版に至らなかったと考えられる幻の本についての記述も含まれており、興味深い。

2) 大阪開成館と三木佐助

大阪開成館は、文政8(1825)年に書籍業の「河内屋佐助商店」として創業し、大正15(1926)年に合名会社「大阪開成館三木佐助商店」、昭和31(1956)年に「三木楽器株式会社」となって現在に至っている²⁾。大阪心齋橋筋の一等地で、今も楽器店として盛業を誇っている。

この三木楽器の本店ビル(現住所は大阪市中央区北久宝寺町3-3-4)が大正13(1924)年建造の大阪開成館ビル(増田清設計、登録有形文化財)で、ビルの入口には「書籍 楽器/大阪開成館/三木佐助」と大書された石のプレートが掲げられている。

大阪開成館の社長は代々「三木佐助」を名乗っており、上記の小倉の教本の奥付に名前があるのは第4代三木佐助(嘉永5年生~大正14年没、西暦1852~1925)³⁾(本名は松田彦七、佐助襲名は明治17年)⁴⁾である。この4代目について『日本出版大観』(出版タイムス社、1931)は、「明治の出版界に千萬長者と呼ばれるものに東に博文館大橋新太郎氏あり、西に大阪開成

1) 戸籍上は「小倉末」であるが、3巻の著書と多くの演奏会プログラムで「小倉末子」を名乗っているため、ここでは「小倉末子」を用いる。

2) 足立昭史・中山朋也・浜本浩明編集『年表「創業180年の歩み」』(三木楽器株式会社、2005)による。

3) 稲岡勝監修『出版文化人物事典』(日外アソシエーツ、2013)375頁による。

4) 三木佐助『玉淵叢話』(開成館、1902)上巻、70頁による。

館三木佐助氏あり、共に好箇の大関にして斯界の偉観とさる」と書き出しており、盛名が高かったことが知られる。続いて同書は、「氏が二十六 [ママ] 歳の時、望まれて主家の養子となり四代佐助を継承し、これより氏の天稟の商才はいよいよ発揮された。即ち出版に於ては小学用書、中等教科書、小中参考書及び一般図書の出版に一大飛躍を展開するの外、氏の郷里に於て農園を経営し、或は神戸に三木茶業部を経営するなど其の活躍振りは真に目醒ましいものがあつたが、殊に氏が浜松に日本楽器製造株式会社を設け或は其の直輸入を試みて我が国楽壇に残した功績は蓋し甚大なるものがある」(139頁)とその主な業績を讃えている。

第4代三木佐助自身は、50歳を記念して書いた自叙伝『玉淵叢話』(開成館、1902)の中で、「音楽界に致したる貢献」の項を設けて、「当楽器店から出版しましたものの中で聊か世に影響を及ぼしたものが二つ三つある」と述べている。その第一が『日本俗曲集、西洋楽譜』(三木書店、明治24年、西暦1891年)で、「内容は日本在来の端唄長唄琴唄などの歌曲を西洋楽譜に現わしたものでそれにヴァイオリン、オルガン、尺八などの使用法と簡単な音楽理論とを附したものであり、「端唄や長唄が風琴手風琴などで人に習わずして面白く弾けると申すのですからたまりませぬ其流行は忽ちの間に日本全国に広がりまして結果は非常に西洋楽器の売行を促し手風琴なども其年よりめっきり輸入額を増大いたしました」と言う。さらに「二十七年にはヴァイオリン指南を出して高尚なる音楽を世に薦めますし二十八年には帝国軍歌を出して東の大捷軍歌西の帝国軍歌と云われる程に流布いたしまして日清戦役当時の敵愾心を呼び起し近く三十三年には鉄道唱歌を発行して海内を風靡致し一時鄙猥の俗歌を退くるに至りましたのは皆さんよく御承知の事ですから申し上げるまでもござりませぬ⁵⁾」と結んでいる。明治20年代から30年代にかけて、洋楽普及の大きな牽引役を果しながら商業的な成功を収めていった様子がよく窺われる文章である。

一方、小倉書簡の宛名人である「三木登吉」は、やがて第5代三木佐助となる人物である。本名は浅田登吉、明治12(1879)年生で昭和17(1942)年没、明治37(1904)年に三木家の養子となった⁶⁾。この人物について『日本出版大観』(1931)は、「氏[第4代三木佐助]の没後、養嗣子三木登吉君が五代佐助を襲名すると共に社長に就任し、先代の遺業をして益々栄えあらしめている。君は奈良県南葛城郡吐田郷村浅田五郎氏の四男、明治三十五[1902]年本店の店員となり、先代佐助氏の薫陶を享け其の明敏なる商才と人格を賞せられ望まれて長女コウ女の養子に迎えられた。昭和四年一月重望を担って大阪書籍雑誌商組合組長に就任し現に其の任にある外大阪書籍株式会社社長、東京開成館取締役等の職にある」(140頁)と記している⁷⁾。

大阪開成館は、明治21(1888)年にオルガン、明治36(1903)年にピアノの販売を開始して西洋楽器を売り捌く傍ら⁸⁾、明治33(1900)出版の『鉄道唱歌』が大当たりして利益を上げ、

5) 同書下巻、84-85頁。

6) 第4代佐助とは異なり、第5代佐助については事典類に記載が見出せなかったため、三木楽器株式会社・歴史保存室の田中晴美氏にご教示頂いた。

7) この記述から明らかなように、ここでの「氏」は第4代三木佐助(松田彦七)を指しているが、「三木佐助」の項の冒頭(139頁)には「明治十二年生」と第5代三木佐助(浅田登吉)の生年が記されている。『日本出版大観』(1931)の著者にとっても、襲名は混乱の元になっていたことが分かる。

8) 書店から楽器店への発展については、齊藤紀子「河内屋佐助の楽器部創設について、三木楽器成立小史」お茶の水音楽研究会『お茶の水音楽論集』第13巻(2011)60-65頁。

才能ある若手の音楽家たちを経済的に援助したことでも知られる⁹⁾。明治41（1908）年には神戸元町三丁目に支店を開設しており¹⁰⁾、神戸の貿易商や音楽関係者とも密接な繋がりを持っていたと考えられる。

3) 「小倉書簡」の概観

大阪開成館所蔵の「小倉書簡」は次の8通である（主な記載内容を括弧内に付記する）。

- 書簡1) 大正5（1916）年10月22日付 [教則本の執筆を承諾する旨]
- 書簡2) 大正6（1917）年6月7日付 [ピアノ教則本の校正刷を受領の旨]
- 書簡3) 大正6（1917）年6月26日付 [教則本の出版時期承知、小曲集の完成時期の問合せ]
- 書簡4) 大正6（1917）年8月4日付 [小曲集の原稿完成と送付の通知]
- 書簡5) 大正6（1917）年8月11日付 [小曲集の執筆料の件]
- 書簡6) 大正6（1917）年8月18日付 [小曲集に係る労力、教則本の修正の件]
- 書簡7) 大正7（1918）年8月23日付 [小曲集原稿料受領、著作権売渡書に関する質問]
- 書簡8) 大正12（1923）年2月25日付 [『ピアノの弾き方』の書名の件]

封筒の表書きは次の通り、いずれも三木登吉宛である（写真1参照）。

- 書簡1) 大阪市東区心齋橋通北久寶寺町角、開成館、三木登吉様
- 書簡2) 大阪市心齋橋通北久寶寺町角、三木登吉様
- 書簡3、4) 大阪市東区心齋橋通北久寶寺町四丁目、三木登吉様
- 書簡5) 大阪市東区心齋橋通北久寶寺町角、三木登吉様
- 書簡6、7) 大阪市心齋橋通り北久寶寺町角、三木登吉様
- 書簡8) 大阪市西区阿波座町上通一丁目、三木登吉様

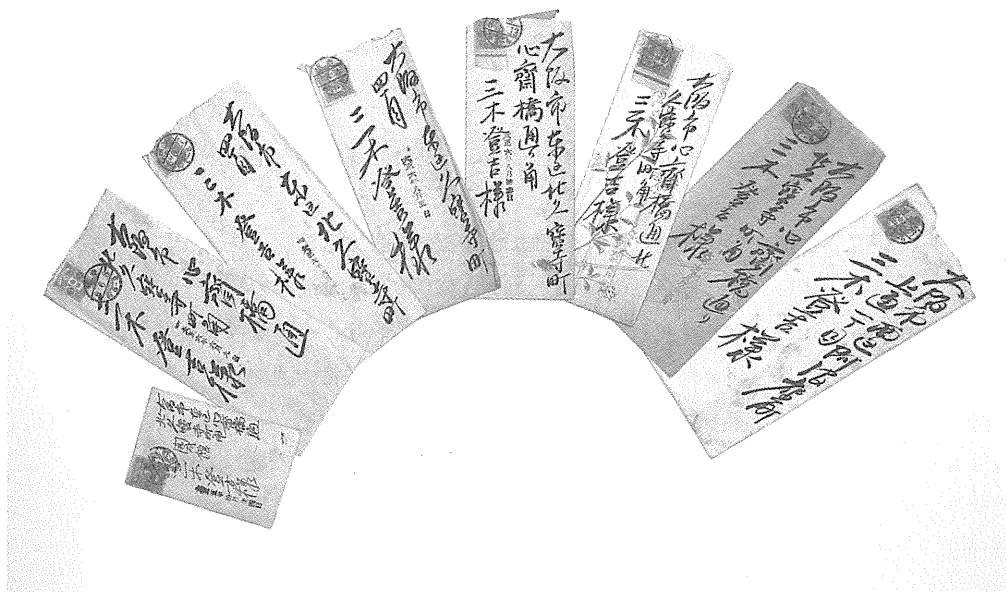
差出人の小倉末子の住所は次の通りである。

- 書簡1～7) 東京市赤坂区氷川町八
- 書簡8) 東京赤坂榎坂五

各書簡の全文を巻末の附録として掲げる。なお、書簡1は洋便箋にペン書きだが、書簡2か

9) 後藤暢子『山田耕作』（ミネルヴァ書房、2014）によれば、「山田は後年、日本最初の民間人による交響楽運動の陰の功労者はほかでもない三木佐助であったと深く感謝している」（p.217）という。なお、同書208頁（および巻末索引7頁）に「三木佐助（四代目三木佐助、本名三木登吉）」とあるのは「五代目」の誤りである。

10) 明治41年4月『音楽界』第1巻第4号掲載の記事に「三木楽器店の発展：大阪三木楽器店にては近来音楽界の発展に伴い大に業務の拡張を要するため神戸元町三丁目に支舗を設置せるよし」とある。『大阪音楽文化史資料、明治大正編』（大阪音楽大学、1968）、記事番号 No. 10281（p.198）。



【写真1】大阪開成館所蔵の「小倉書簡」8通の封筒（左端の書簡1から順に書簡8まで）¹¹⁾

らはいずれも和紙巻紙に筆書きである。

4) 『新撰ピアノ教則本』に関する言及

「小倉書簡」8通の内、6通（書簡1、2、3、6、7、8）で『新撰ピアノ教則本』への言及がある。

まず、書簡1（1916年10月22日付）に「家庭用教則本の事に付き兄へ御話し置下候由承り候御承諾致し、新しきもの成作致し度存じ候間その御積りにて御待ち置下度候」とあり、教則本出版については1916年10月までに小倉末子の兄の小倉庄太郎（1864-1946）を通じて依頼があったことが分かる。庄太郎は神戸元町一丁目で貿易商を営んで成功していたので¹²⁾、三木登吉とは面識があった可能性が高い。続いて「出来得る限り（多少自作物も入れ）御万足置下やう致し度存じ居候」と記されているところから、小倉末子自身が作曲した曲も入れる考えであったことが知られる¹³⁾。

続いて、書簡2（1917年6月7日付）に「先日御送置下候ピアノ教則本の原稿確かに御受取申候 来る十七日に御上京との由伺置付御光来置下度候 それ迄には原稿も全部調べ置き候間左様御承知置下度願上候」とあり、ピアノ教則本の校正刷が開成館から小倉の手元に6月初頭

11) 撮影 宗石佳子（写真2も同じ）。

12) 庄太郎については津上智実、橋本久美子、大角欣矢『ピアニスト小倉末子と東京音楽学校』（東京芸術大学出版会、2011）参照。

13) 出版された教則本では作曲者名のない曲が大半であるため、どれが小倉末子の手になるものかは不明である。

に届いて、その校正を6月17日の登吉の上京までに終えておく段取りであったことが分かる。

書簡3（1917年6月26日付）には、「教則本は九月下旬頃に出来上るやう承知致候」とあり、9月下旬に刊行予定と登吉から通知があったことが知られる。

ところが、書簡6（1917年8月18日付）において、小倉は「次に教則本に付き御願申上度事一寸御ざ候 それは他に御ざなく候へども先日原稿をくり返し居り候折一寸気付きたる事にて二冊分なれる原稿の第一冊目に似よつたる曲二つ御ざ候間面白からず覚え候間 御都合御よろしければ何卒一曲御省き願度候」と手直しを申し出る。曲調の似た曲が2曲あるのは面白くないので1曲を省いてほしいと希望したのである。具体的には、「場所は故郷（Home）と申す曲よりも二頁ばかり手前にて（私の原稿にては拾五頁と相成て居候）ワルツ（Moderato）三拍子の次に御ざ候二拍子曲（Allegretto）にて候 念の為私の原稿を切ぬき封入致し置候間御面倒ながら御一覧の上御省きおきに下度候 十文字にて記し此曲を御省き下さいと認めあり候間左様御承知置下度候 勝手なる御願御許願上候」と説明しており、実際、この二拍子のアレグレットの曲が除かれた形で出版されている¹⁴⁾。

この件について、翌夏の書簡7（1918年8月23日付）で「偕て先日一寸御願申上置き候教則本中の一曲の件いかが相成候や御尋ね申上候」と尋ねているところを見ると、開成館側から特段の連絡がないまま一年が経過したことが分かる。

それから約4年半後、書簡8（1923年2月25日付）に「原稿の事に付きて御書面拝見致候書込むべき三度二重音階は本日書留にて御送り申上候間御受取を下度候」とあり、大正13（1924）年5月24日に出版された第四版¹⁵⁾に向けて、加筆がなされたことが分かる。この時に送られた三度二重音階の手書きの楽譜は、現在も大阪開成館に残されている¹⁶⁾。

以上から、『新撰ピアノ教則本』出版については、1916年初秋に開成館から小倉へ依頼があり、翌1917年の5月以前に脱稿し、夏には校正まで滞りなく済んで、9月下旬刊行という段取りがついていたことが明らかとなった。しかるに実際の出版が1919年1月までずれ込んだのはなぜなのか、この点については改めて後述する。

5) 『ピアノ小曲集』に関する言及

「小倉書簡」8通の内、4通（書簡3、4、5、6）で『ピアノ小曲集』への言及がある。

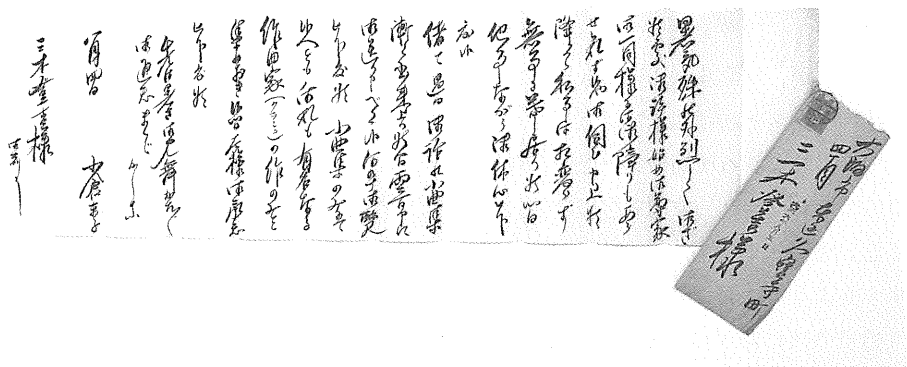
まず、書簡3（1917年6月26日付）で「もし次に小曲集を（原稿を）七月中に作り上げ御送り申さば何時頃出来上る事にて候や 御尋ね申上候」と尋ねており、教則本に続いて小曲集にもすぐに着手する考えであったことが知られる。

実際、書簡4（1917年8月4日付）（写真2参照）には、「過日御話の小曲集漸く出来上り候

14) 出版された『新撰ピアノ教則本』には「故郷（Home）」という曲は見当たらないが、同書26頁にモデラート（Moderato）の「ワルツ」が掲載されており、それに続くのは「ト調長音階」、「分散和弦の練習（ト調）」、八分の三拍子でアンダンテの「民謡（想郷の曲）」であるので、ここで問題になっている「二拍子曲（Allegretto）」は削除されたものと考えられる。

15) 大阪開成館から頂戴したコピーの奥付による。

16) しかしながら筆者が古書店から入手した同書の第10版（昭和4年4月1日発行）を見る限り、この加筆は実際には反映されなかったようだ。



【写真2】書簡4）：大正6（1917）年8月4日付

間両三日中に御送り申べく候 何卒御覧置下度候」と記されており、8月4日には小曲集の原稿も仕上げていたことが分かる。続いて、「小曲集の名にて候へども何れも有名なる作曲家（クラシカ）の作のみを集めおき候間左様御承知置下度候」と記しており、有名作曲家の作品を選びすぐって編集するという方針であったことが理解される。

続いて、書簡5（1917年8月11日付）には、「偕て先日御届申上候小曲集御入手置下候由就ては右に對する謝礼は前教則本同様にては如何にて候や 御思召の程も可有之候間尊意に御任せ申べく候」とあり、執筆料については教則本と同額でとの意向を示している。

これに開成館側から50円での返事があった¹⁷⁾のに対して、書簡6（1917年8月18日付）で、「御書面拝見致し候 小曲集に付き教則本と労力に相違ある由にて五拾円にてとの御希望に候様拝承仕り候 既に前便にて御一任申上たる事故万然御取計ひ置下度候」と答えており、小曲集は教則本ほど労力が掛かっていないという理由で、三木登吉が教則本より少額の前稿料50円を提示したことが分かる。これに対して小倉は、金額はさておき、労力の理解については異論があると次のように反論している。「然し一寸御辨解申上置き度は教則本と小曲集との労力対照の点は少々御意見を異せる点有之候即ち筆を採つて働くには多少労力の相違御ざ候へども之は我等専門家を待たずとも出来得る事にて候 要は小曲を集めるに付き初歩の人の進歩に従ふべき曲の程度、性質、内容、指使など委細なる点に最も注意致す可き必要有之 其点に於きては教則本以上に労力を要する位にて候間念の為申上置候」と言う。ピアノの専門家として、ピアノ初心者の上達にふさわしい曲の難易度、性質、内容、指遣いなどに至るまで細心の注意を払って作成したこと、この点で教則本以上の労力を要したことが明かされている。

17) 書簡5の余白に「八月十三日 五拾円と返ズ」との三木登吉のメモ書きがある。

6) 幻の『ピアノの弾き方』あるいは『ピアノ研究者の心得』

ところで、書簡8（1923年2月25日付）には、未刊に終わった幻の著作の話が出て来る。ここで小倉は、「先日御持帰りを下候原稿の題を『ピアノの弾き方』と御つけに下候間も少々面白可らずと存じ候間『ピアノ研究者の心得』とでも変へ『心得』と云う事を主になされ度候」と述べて、三木登吉に渡した原稿に『ピアノの弾き方』という書名を出版社側がつけてきたことに対して、『ピアノ研究者の心得』に変更することを求めている。その理由を、「近代洋琴演奏講話は私講の為 初歩の人々の為には無論不適當と存じ候 却ってその精神を吸収し得ず誤解を招く事と私は存じ候へども右は一寸意見を申述ぶるのみにて候間御随意に御取計ひを下度候」と説明しており、ピアノの専門家教育に関する著作であったことが窺われる。

翌1924年に大阪開成館から『ピアノの弾き方』と題する本が出版されたが、著者は牛山充（1884-1963）であって、小倉末子ではない。小倉執筆の原稿が本として出版されていれば、あるいはせめて原稿だけでも残されていればと思わずにはいられないが、今の所、いずれも見つかっていない。

7) まとめと謝辞

以上の「小倉書簡」の検討から、小倉末子は1916年秋に依頼のあったピアノ教本の原稿を、ピアノ教則本については翌1917年5月以前、ピアノ小曲集については同年8月4日までに脱稿しており、ピアノ教則本については同年9月下旬刊行の見通しを得ていたことが明らかになった。ピアノ小曲集についても同年秋の出版が可能であったと推測される。

しかるに、この2巻のピアノ教本が実際に出版されたのは1919年1月末から2月初頭にかけてのことであり、その間、1年4ヶ月近くも寝かされていたことになる。これは一体どうしたことであろうか？

その理由について手掛かりを与えてくれるのが、書簡3（1917年6月26日付）に見る次の記述である。ここで小倉は、「もし次に小曲集を（原稿を）七月中に作り上げ御送り申さば何時頃出来上る事にて候や 御尋ね申上候」と尋ねた上で、「実は朝鮮李王家へ二冊そろへ献上致し得ば好都合と存じ居り候へども時期のある事にて候間 印刷の方の御都合承り度候 然し只今の處これは内々の事にて候間左様御承知置下度願上候」と明かしている。つまり、ピアノ教則本と小曲集の2巻のピアノ教本を揃えた形で朝鮮李王家へ献上したい、そのために出版時期を選びたいという意向が著者にあったためと考えられる。別稿で明らかにしたように¹⁸⁾、小倉は1916年12月に朝鮮京城へ演奏旅行を行なって、宮中で演奏した際に厚く労われて感銘を受けていたので、その返礼として自著のピアノ教本を献上したいと考えていたものであろう。出版された教本2冊には献辞がないため、この意向は「小倉書簡」によってのみ知られるところである。翻ってそれは「小倉書簡」の重要性を際立たせるものでもある。

18) 津上智実「旅する女性ピアニスト～小倉末子の朝鮮演奏旅行」神戸女学院大学女性学インスティテュート『女性学評論』第23号（2009年3月発行）、67～91頁；同：「朝鮮の諸新聞に見るピアニスト小倉末子の京城演奏旅行」同『女性学評論』第28号（2014年3月発行）、93～113頁。

このように、「小倉書簡」は2巻のピアノ教本の成立と編集方針について貴重な証言を含む史料群である。このような書簡が100年近くも大阪開成館できちんと保管されてきたことに敬意を表し、寿ぎたい¹⁹⁾。

謝辞：本論執筆に当たって、「小倉書簡」の閲覧と研究を許可下さった三木楽器株式会社第7代社長の三木佐知彦氏、最初に「小倉書簡」の存在を知らせて下さった同社の古参社員（当時）の橋本源三氏、書簡の解説にお力添え下さった同社歴史保存室参事の田中晴美氏、三木楽器への紹介の労を執って下さった大阪音楽大学音楽博物館准教授（当時）塩津洋子氏のお名前を記して感謝の意を表す。

また、本稿は神戸女学院大学研究所2014年度総合研究助成によって支えられていることを記して感謝する。

附録：書簡全文

三木登吉宛の小倉末子書簡（大阪三木楽器開成館所蔵）

書簡1）大正5（1916）年10月22日付

拝啓 冷気日々増し候處御許様には御障りもなき御様子何よりと存じ上候

偕て去る春以来色々と御面倒をかけ御気の毒の至りに存じ候 去る音楽会²⁰⁾後面白からぬ事を申したる人も有之候よう兄よりきき及び候 さぞ不愉快に思召されたる事と存じ候へども何分種々の事情も伴いたる折故非難を受くるも或は不思議ならぬ事かとも存じ候 只御許様御自身にて音楽会中の有様御覧置下さりし事のみ残念に存じ候

今回神戸へ来る途中或は来月京都へ来る折一度御訪ね申上度存じ居り候

十一月廿五日頃京都へ御ついでおあり遊ばされ候はば音楽会²¹⁾へお出で下度候

家庭用教則本の事に付き兄²²⁾へ御話し置下候由承り候 御承諾致し、新しきもの成作致し度

19) 田中晴美氏作成のリスト「三木楽器株式会社本社に保存されている書簡等」によれば、山田耕筰関係書簡86通、成田為三書簡29通、武鳥又次郎書簡21通、園山民平書簡16通、斎藤佳三書簡14通、内藤俊二書簡12通、三木露風書簡10通、多梅稚書簡10通、小倉末子書簡8通、田中銀之助書簡8通、永井幸次書簡7通、信時潔書簡4通、目賀田万世吉書簡3通、大和田建樹書簡2通、西野虎吉書簡2通、平沼秀三書簡2通、楠見恩三郎書簡2通、他、計263通が保管されている。

20) 1916年6月25日（日）に大阪の北浜帝国座で行なわれた羽衣管弦楽団主催「ピアニスト小倉末子嬢招聘慈善音楽会」を指すのではないかと考えられる。小倉は前日24日（土）には神戸の湊川聚落館で神戸女学院同窓生有志者および神戸基督教婦人矯風会支部主催「慈善大音楽会」に、翌26日（月）には京都の三条青年会館で「日本健康会施薬費拠出慈善音楽会」に出演している。この時、三木楽器店は小倉末子の絵葉書を作成して、絵柄面の下部に「小倉末子嬢、神戸三木楽器店」と印字しており、帰朝したばかりで話題のピアニストのバックアップに相当力を入れていたものと思われる。しかし、登吉自身は意外にもその演奏を聞き逃したことがこの書簡の文面から知られる。

21) 1916年11月25日（土）に京都の青年会館で行なわれた日本健康会主催の演奏会（京都の『日出新聞』に「小倉末子嬢来る」という見出しで写真入りの記事が出たが、演奏会の正式名称は不詳）を指す。

22) 小倉庄太郎（1864-1946）を指す。

存じ候間その御積りにて御待ち置下度候 出来得る限り（多少自作物も入れ）御万足置下やう
致し度存じ居り候

先は御返事かたがた申上候

拾月廿二日 小倉末子

三木登吉様

封筒（表）：大阪市東区心齋橋通北久寶寺町角、開成館、三木登吉様

封筒（裏）：東京市赤坂区氷川町八、小倉末子

書簡 2）大正 6（1917）年 6 月 7 日付

拝啓 日に増しお暑く相成り候處益々御盛栄のほど奉賀候

偕て先日御送置下候ピアノ教則本の原稿確かに御受取申候 来る十七日に御上京との由伺置
付御光来置下度候 それ迄には原稿も全部調べ置き候間 左様御承知置下度願上候

先は御返事まで かしこ

六月七日 小倉末子

三木登吉様

封筒（表）：大阪市心齋橋通北久寶寺町角、三木登吉様

封筒（裏）：東京市赤坂区氷川町八、小倉末子

書簡 3）大正 6（1917）年 6 月 26 日付

拝啓 御丁寧なる御書面有難く拝見致し候 御無事に御帰阪遊ばされ候由何よりと存じ上候
御上京の節は結構なる御品頂戴致し忝けなく存じ候

偕て教則本は九月下旬頃に出来上るやう承知致候 もし次に小曲集を（原稿を）七月中に作
り上げ御送り申さば何時頃出来上る事にて候や 御尋ね申上候 実は朝鮮李王家へ二冊そろへ
献上致し得ば好都合と存じ居り候へども時期のある事にて候間 印刷の方の御都合承り度候
然し只今の處これは内々の事にて候間左様御承知置下度願上候

先は御礼かたがた御尋ねまで かしこ

六月廿六日 小倉末子

三木登吉様

封筒（表）：大阪市東区心齋橋通北久寶寺町四丁目、三木登吉様

封筒（裏）：東京市赤坂区氷川町八、小倉末子

書簡 4）大正 6（1917）年 8 月 4 日付

暑気殊の外烈しく御ざ候處御許様始め御尊家御一同様には御障りもあらせられず候や 御伺
い申上候

降って私事は相変わらず無事に恙く居り候間他事ながら御休心置下度候

偕て過日御話の小曲集漸く出来上り候間両三日中に御送り申べく候 何卒御覧置下度候 小
曲集の名にて候へども何れも有名なる作曲家（クラシカ）の作のみを集めおき候間左様御承知

置下度候

先は暑さ御見舞かたがた御通知まで かしこ

八月四日 小倉末子

三木登吉様 御前に

封筒（表）：大阪市東区心齋橋通北久寶寺町四丁目、三木登吉様

封筒（裏）：東京市赤坂区氷川町八、小倉末子

書簡5）大正6（1917）年8月11日付

拝復 仰せの通り酷暑日々堪え難き候處益々御壮健に渡らせられ候由大慶に存じ上候

俵て先日御届申上候小曲集御入手置下候由 就ては右に對する謝礼は前教則本同様にては如何にて候や 御思召の程も可有之候間尊意に御任せ申べく候

右御返事まで申上候

八月十一日 小倉末子

三木登吉様 御前に

[余白の三木佐助のメモ書き] 八月十三日 五拾円と返ズ

封筒（表）：大阪市東区心齋橋通北久寶寺町角、三木登吉様

封筒（裏）：東京市赤坂区氷川町八、小倉末子

書簡6）大正6（1917）年8月18日付

御書面拝見致し候 小曲集に付き教則本と労力に相違ある由にて五拾円にてとの御希望に候様
拝承仕り候 既に前便にて御一任申上たる事故万然御取計ひ置下度候

然し一寸御辨解申上置き度は教則本と小曲集との労力対照の点は少々御意見を異せる点有之候 即ち筆を採って働くには多少労力の相違御ざ候へども之は我等専門家を待たずとも出来得る事にて候 要は小曲を集めるに付き初歩の人の進歩に従ふべき曲の程度、性質、内容、指使など委細なる点に最も注意致す可き必要有之 其点に於きては教則本以上に労力を要する位にて候間念の為申上置候 何卒御了解置下度候 次に教則本に付き御願申上度事一寸御ざ候 それは他にては御ざなく候へども先日原稿をくり返し居り候折一寸気付きたる事にて二冊分なれる原稿の第一冊目に似よつたる曲二つ御ざ候間面白からず覚え候間 御都合御よろしければ何卒一曲御省き願度候

場所は故郷（Home）と申す曲よりも二頁ばかり手前にて（私の原稿にては拾五頁と相成て居候）ワルツ（Moderato）三拍子の次に御ざ候二拍子曲（Allegretto）にて候 念の為私の原稿を切ぬき封入致し置き候間御面倒ながら御一覽の上御省きおきに下度候 十文字にて記し此曲を御省き下さいと認めあり候間左様御承知置下度候 勝手なる御願御許願上候

先は御返事かたがた御願まで かしこ

八月十八日

小倉末子

三木登吉様 御前に

封筒（表）：大阪市心齋橋通り北久寶寺町角、三木登吉様

封筒（裏）：東京市赤坂区氷川町八、小倉末子

書簡7）大正7（1918）年8月23日付

拝啓只今御書面拝受仕り候 小切手金五拾円も確かに御拝受申候

偕て先日一寸御願申上置き候教則本中の一曲の件いかが相成候や御尋ね申上候 また誠に勝手に候へども御封入置下候著作権売渡書中の追加第一項及第二項少々解り兼ね候間御手数ながら御説明置下度候 本書の組織及び記述の方法に付きて云々及び書冊名称はいかなる場合に御変更遊ばさるるものにて候や一寸御聞かせ置下度御願申上候

先は御返事かたがた御尋ねまで かしこ

八月廿三日 小倉末子

三木登吉様

[余白の三木佐助のメモ書き] 当方用紙は一般に使用仕居り候様にて若し御差支あらば然るべく御取捨置下度候 八月廿五日

封筒（表）：大阪市心齋橋通り北久寶寺町角、三木登吉様

封筒（裏）：東京市赤坂区氷川町八、小倉末子

書簡8）大正12（1923）年2月25日付

拝復、余寒なおも烈しく候處又益々御機嫌よく何よりと存じ上候

過日御上京の節はわざわざ御光来下恐縮に存じ上候

原稿の事に付きて御書面拝見致候 書込むべき三度二重音階は本日書留にて御送り申上候間御受取を下度候

偕て先日御持帰りを下候原稿の題を「ピアノの弾き方」と御つけに下候へども少々面白可らずと存じ候間「ピアノ研究者の心得」とでも変へ「心得」と云う事を主になされ度候

近代洋琴演奏講話は私講の為 初歩の人々の為には無論不適當と存じ候 却ってその精神を吸収し得ず誤解を招く事と私は存じ候へども右は一寸意見を申述ぶるのみにて候間御随意に御取計ひを下度候

之も書留にて御返却申し上げべく候間御入手御願申上度候

先は御知らせかたがた御返事まで

二月廿五日 小倉末子

三木登吉様

封筒（表）：大阪市西区阿波座町上通一丁目、三木登吉様

封筒（裏）：東京赤坂榎坂五、小倉末子

（原稿受理日 2014年9月24日）